

## 共通テストとこれからの高等学校国語科の授業

熊谷芳郎

私に課されたテーマは、現在進捗しつつある大学入試改革が国語科（特に高等学校国語科）の授業に及ぼす影響について、大学に籍を置くものの立場から考えていくことである。

このテーマに対して、カリキュラムや授業内容というものは国語という教科でどのような力をつけるべきか、どのような体験をさせるべきかという点から考えていくものであり、大学入試に合わせて考えるようなものではないという「そもそも論」が出てきそうである。しかしながら、もしも大学入試で小論文が課されなかったら「国語表現」の授業は現在のように指導されたであろうか、もしも大学入試で古典の分野を除外する（中でも漢文を除外する）大学がないとしたら古典の指導は（特に漢文の指導は）どう変化するであろうか、と想像してみると、大学入試が高等学校の授業に与える影響は大きなものがあると言わざるを得ない。高等学校のカリキュラムも授業内容も大学入試を強く意識して組

み立てられており、その影響の大きさは『学習指導要領』よりもはるかに大きいともいえるだろう。

私自身、大学で「国語科教授法」を担当しているが、受講生の中に「高校時代に文学教材を全く授業で指導されなかった」という学生がいたことがある。国語の先生の（つまり高校側の）説明は、「文学教材を出題する大学は減っているし、勉強しても点数が一定しない。そんなものに時間をかけるよりも、評論文の読解力をつけた方が確実に国語の点数が伸びるから」というものであったそう。このような高校は特別であろうが（そう信じたい）、しかし、高等学校の授業が大学入試の動向に左右されるのは事実であり、その意味で今回のテーマは妥当なものと考えられる（高等学校の授業で文学教材に多く触れさせたいのなら、『学習指導要領』云々ではなく、幸田国広（二〇一九）が述べているように（六頁）、大学入試で文学教材からの出題を増やせばよいということにもなる）。

以上のような状況を踏まえて、ここでは大学入試が国語の授業、特に高等学校の授業に与える影響について考えていきたい。

### 一、大学入試改革の具体

ところで、大学入試改革とは具体的に何を想定したらよいのだろうか。大学入試改革の実体についての論議から始めたのでは、授業の変化に至る前に紙数が尽きてしまう。そこで、本稿ではセンター試験から大学入学共通テストへの変更を中心に考えていくこととする。では、大学入学共通テスト（以降「共通テスト」とする）のどこが従来のセンター試験と異なるのだろうか。どこが、「新しい」のだろうか。この点から考えてみよう。しかし、共通テストはこの原稿を作成している段階では実施されていない。そこで、共通テストの内容を想定させるものとして、共通テストの試行として二〇一七年、二〇一八年に実施されたもの（以後「試行問題（二〇一七）」「試行問題（二〇一八）」と呼ぶ）から考えていくこととする。

ただ、センター試験も共通テストも『学習指導要領』に則って作問されることから、共通テストについて考えていくことは、『学習指導要領』にも触れながら考えていくこととなる。

共通テストの内容については、大学入試センターが二〇二〇年一月に発表した「令和三年度大学入学希望者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」（以下、大学入試センター（二〇二〇）と呼ぶ）が参考となる。ここでは、「出題教科・科目の問題作成の方針」と題した別添資料に、国語の「問題作成の方針」として以下の記

述がある。

言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力を求める。近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。（一頁）

この内容を箇条書きにするなら、以下のようになる。

- ① 言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力を求める。
- ② 近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とする。
- ③ 言語活動の過程を重視する。
- ④ 異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

ここで示された四点が共通テストとして出題されるものとすると、大学入試改革の具体的な方向は、この四点にまずは絞られる。そこで、これら四点について、入試改革の具体的な姿と、それによる高等学校の国語科に与える影響について考えていこう。

## (1) 多面的・多角的な解釈と目的な場面等にに応じて書くこと

①については、「言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり」という前半部は、(4)で述べる複数素材の読み比べにつながるので、詳細はそちらに譲る。それに対して後半の「目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める」は、「書くこと」の指導事項を意識した発問と、(3)で述べる言語活動場面を設定した発問とに関わっていると考えられる。

記述式問題の出題は見送られたにも関わらず、この出題方針が残ったのは、『学習指導要領』で「書くこと」の指導が位置づけられているからである。特に何らかの言語活動を行い、その結果をレポートや要約文にまとめようとするなら、全体の構成や用語の選択など「書くこと」に関する能力は欠かせない。

その際、留意しなければならないのは、書く活動を設定したから書く能力が身についたということにはならないということである。要約文を書かせても、要約文の書き方を何らかの形で学ぶ場面を設定しなければ、要約文を書けるようにはならない。もちろん能力の高い生徒なら書き方をなんとか身につけていくだろうが、そのような生徒ばかりではない。やはり、事前に何らかの学習の機会があることによって、要約文が書けるようになるのである(その指導の例を本文の最後に示す)。感想文の書き方を指導することもないままに読書感想文の課題を出すような教室を時々目にするが、見て覚える、見よう見まねで学びとれという時代ではないだろう。「試行問題(二〇一七)」「試行問題(二〇一八)」にも、場

面が設定された上で読んだり話し合ったり書いたりという言語活動が設定され出題されている(記述式問題にするために言語活動の場面が設定された訳ではないだろう)。その意味で、「書くこと」「話すこと・聞くこと」の指導と言語活動の場面設定とが有機的に関連付けられた年間計画がこれまでに必要となる。

## (2) 実用的な文章の扱い

②の「近代以降の文章(論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章)、古典(古文、漢文)といった題材を対象とする」の中に示された「実用的な文章」について考えてみよう。

試行問題(二〇一七)では生徒会規約が、試行問題(二〇一八)では著作権法が出題され、それぞれ話題になった。

ところで、そもそも「実用的な文章」とはどういうものだろうか。たとえば、「実用的な文章」は、『高等学校学習指導要領』(現行版解説)に、「国語総合」の「読むこと」の言語活動に関連して次のように語られている。

「実用的な文章」とは、一般的には、具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれた文章である。それには、報道や広報の文章、案内・紹介、連絡、依頼などの文章や手紙のほか、会議や裁判などの記録、報告書、説明書、企画書、提案書などの実務的な文章、法律の条文、キャッチフレーズ、宣伝の文章などがある。また、インターネット上の様々な文章や電子メールの多くも、実用的な文章の一種と考えることができる。(二六頁)

つまり、『高等学校学習指導要領』(現行版解説)で「一般的には、

具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれた文章」と規定されているものが、「実用的な文章」ということになる。

なお、『学習指導要領』の記述としては、新『高等学校学習指導要領』解説でも「現代の国語」の「書くこと」の言語活動の解説に同様の文章があり、『学習指導要領』は二期にわたって「実用的な文章」を扱うことを求めている。さらに付け加えるなら、「実用的な文章」という言葉は、「高等学校学習指導要領」には既に一九七〇年度版、一九九八年度版に登場しており、決して新しい内容ではない。

現行のセンター試験でも、『高等学校学習指導要領』を受けて、実用的な文章は既に問題文として出題されている。たとえば、二〇一九年度の漢文には、杜甫が叔母の死を悼んだ文章が出題されている。これは、叔母の墓誌として石に刻まれた文章である。墓誌というのは、文学のようなフィクションではなく、「一般的には、具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれた文章」と考えてよい。確かに現代文の問題文としてはセンター試験に実用的な文章が出題されたことはないかもしれないが、対象を古典にまで広げるなら、実用的な文章を扱うことは決して新奇なことではない。

したがって、これまで授業で扱ってきた素材の範囲を少し広げるところから、授業を考えていくことが想定される。その素材の範囲は、先に示した『高等学校学習指導要領』（現行版解説）にあった「報道や広報の文章」以下のものである。

ただ、これらの素材を一つ一つ取り上げて詳細に読解する指導

までは必要ない。むしろ何かの目的のために情報を得るための資料として扱いたい。『学習指導要領』（現行版）でも、国語科の目標が中学校では「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成」とあるのに対して高等学校では「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成」（傍線はどちらも引用者による）とある。それについて、「目的に理解」するとは、表現の仕方、表現された内容や事柄を、目的や場にに応じて間違いなく理解するということである。（『高等学校学習指導要領』（現行版解説）と説明されている。「目的や場にに応じて」理解するのであるから、まずは「目的や場」の設定が必要である。ある目的のために読み、活用していくという場を学習活動として設定したい。その具体例については後述する。

### （3）言語活動の設定

大学入試センター（二〇一七）で公表されたモデル問題では、父と娘が地域として求めるのは観光化か静寂さかで意見を述べ合うという場面設定がなされていたことが話題となった。既成の文章を示してその部分的な解釈を問うという従来のセンター試験の形式とは大きく異なり、言語活動の場面が設定され、その活動内容自体が問題になるという新奇な問題とされた。

ここで言語活動というものを、生徒同士が話し合う活動というように捉えるなら、生徒同士が話し合う場面を取り出した問題は、二〇一六年度以降センター試験の国語の問題としては毎年出題されている（国語科以外の問題としては、より以前から話し合い場面を設定した選択肢問題がある）。

中でも、二〇一八年度の第1問評論問題では、話し合いの中で

出た意見の中から適切なものを選ぶという形式ではなく、話し合いそのものの論理を追いながら適切な文中の一節を選ぶという問題が出題された。生徒の話し合いでは誰かが必ず正答を述べるとは限らず、時には全員が誤解したままに話し合いが進むこともある。しかし、その場合でも、ちよつとした発言がきっかけとなり全員の理解がグッと深まることがある。二〇一八年度問題は、そのような言語活動場面を選択肢問題としている。

したがって、共通テストになるから言語活動の場面が設定された問題になるわけではない。そして、記述式問題がなくなるから言語活動の出題もなくなるといってもいい。

そもそも言語活動は、『学習指導要領』（現行版）で求められていることであるので、既に国語科授業の中に定着していなければならないはずのものである。しかし、一向に定着する気配がなく、さらにセンター試験で出題してもそれが大きな話題になるわけではない。そのような現状が背景としてあり、モデル問題の大問として出題されたために注目を集めた、ということになろう。

したがって、言語活動の場面は授業の中に設定することは今後必要となる。やや古い話になるが、OECDによるPISA二〇〇〇において、「チャド湖」についての出題があった（文部科学省（二〇〇五）。「サハラ砂漠にあるチャド湖の水位変化を示し」たグラフと、「チャド湖は、最後の氷河時代の紀元前二〇〇〇年ごろに完全に姿を消しましたが、紀元前一〇〇〇年ごろに再び出現しました」という説明文を読み、グラフが一〇〇〇年から始まっていることを読みとった後に「このグラフの始まる年として、

どうしてこの年を選んだのですか」という問があった。それに対する日本の「無答」率は二四・七%とOECD平均の一七・九%を大きく上回るとともに、主要一二十か国中最も多かった。文章の記述を表やグラフに改めるといふ体験をしていれば、グラフをこの年から始めることは容易に理解できるはずである（一一〇〇年以前は湖が消えているのだから）。無答率の高さは体験の乏しさが大きく影響したと考えられる。

言語活動を想定した問題には言語活動を体験しているかどうかが大きく影響することは容易に想像される。したがって、授業の中で、何らかの言語活動の場面を設定することはどうしても必要である。

#### （４）複数素材の読み比べ

試行問題（二〇一八）には、複数の評論（第1問）、ポスターと法令と説明文（第2問）、詩とエッセイ（第3問）、『源氏物語』と『遍昭集』（第4問）、『莊子』の訳注と『郁離子』（第5問）というように、それぞれ複数の素材を読み比べる問題が出題されている。これは、『高等学校学習指導要領』（現行版）に、次のようにあるのを受けたものである。

エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。（『国語総合』の「読むこと」の「言語活動」）

そして、『高等学校学習指導要領』（現行版解説）には、次のような説明がなされている。

「様々な文章を読み比べ」とは、古典や近代以降の文章を

問わず、また、文学的な文章、論理的な文章、実用的な文章を問わず、多種多様な文章を読み比べることである。その際、例えば、それらの文章を時代を超えた一続きの言語文化としてとらえ、古典で描かれた話が近代以降の文章にどのように描き直されているのか、対象は同じでも時を経てどのようにとらえ方や描かれ方が変化していったのか、また、和歌（短歌）や俳句のように同じ形式をとりながら近世までと近代以降とでどのように異なるのかなど、視点を定めて読み比べることが大切である。（二六頁）

ここには、読み比べの方法までが具体的に示されている。それを簡条書きすれば、次のようになる。

一 古典で描かれた話が近代以降の文章にどのように描き直されているのか

二 対象は同じでも時を経てどのようにとらえ方や描かれ方が変化していったのか

三 和歌（短歌）や俳句のように同じ形式をとりながら近世までと近代以降とでどのように異なるのか

古典と近代以降の文章などの時代を超えた文章同士の比較や、いわゆるジャンルを超えた素材同士の比較が求められている。古典（古文・漢文）について、現代語訳して終わりという授業からの脱却が求められていることは間違いない。

## 二、求められる授業の具体像

では、どのような変革が求められているのだろうか。これまで

検討してきた共通テストの方向性から具体的に見えてきた授業像としては次の三点ということになる。

（１）何らかの目的のために実用的な文章を読む場を設定する。

（２）言語活動の場を設定する。

（３）複数の文章を比較する場を設定する。

これら三点を念頭に授業を構想するなら、次のようになるだろうか。

ある特定の学習を目的をして実用的な文章を含めて複数素材を比較しながら読みとり、何らかの言語活動につなげる学習を組織する。

このような姿勢で進められる授業を一言で言えば「探究的な学習」ということになる。想定される授業とその進め方について次に述べよう。

### （一）授業の概要

国語科の「探究的な学習」として、たとえば次のような授業が考えられる。

① 文章に表やグラフを加筆することを目的として読む。

② 要約文や感想文を書くことを目的として読む。

この学習を進める上で留意すべき点は、学習の進め方を学習者自身が調べる点にある。表やグラフを作る上での注意点や、各種グラフの効果と課題、あるいは要約文や感想文の書き方や留意点について、生徒自身が調べ、情報を集めて持ち寄り、それらの情

報の中から目の前の素材に適合するものを取捨選択して目的を達成していく、その過程が学習となる。情報収集に当たって、生徒たちがまず頼るのがインターネット、次に図書館の蔵書であろう。「インターネット上の様々な文章」「説明書」などの「実用的な文章」を読み、学習を進めていく。「具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれた文章」が「実用的な文章」であるなら、それらを活用するに当たっても生徒に具体的な目的を持たせたい。

## (二) 評価の対象

論理的な文章や文学的な文章を教材とした学習では、教材自体の中に価値があるという前提に立ち、学習はその価値を教材から掘り出すことであった。それに対して「実用的な文章」を用いた学習では、それらを活用する活動によって価値が創造される。したがって、活用する目的によりその文章の価値は異なってくる。指導する側にも意識の転換が求められる。

したがって、このような学習では、結果ではなく、学習の過程を重視することがこれまで以上に重要となる。たとえば、次の点について、生徒自身に振り返りをさせたい。

- ① どのような情報を集めたか。
- ② 集めた情報の相違点をどう分析したか。
- ③ 分析の結果に基づき、集めた情報の中からどれを取捨選択したか。

④ 選択した情報を成果物のどの箇所にどのように生かしたか。  
これらの振り返りと成果物との対応について指導し、評価するようにしたい。

## (三) 求められる指導観の転換

このような指導を行うためには、指導者にも次のような指導観の転換が求められる。

- ① 結果が見える課題の解決を求める学習観からの脱却
- ② 学習方法を提示して同質の成果物を求める指導観から、学習方法そのものを学習者が発見することを求める指導観への転換

今年生まれた新生児は、八〇歳で二二世紀を迎えるのである。ドラえもんの世界を体験するのである。いかに効率よく正解を見つけるかという力とは異なる力を、今回の大学入試改革は求めているといえるだろう。

以上、大学入試改革が高等学校国語科の授業に及ぼす影響について思いつくまゝに述べた。意を尽くせぬ箇所も多いが、もはや紙数も尽きた。読者諸賢のご批評を待ちたい。

## 【引用文献】

- 文部科学省 (二〇〇五) 『PISA調査(読解力)の公開問題例』二〇〇五年一月  
文部科学省 (二〇一七) 「大学入學選抜改革について」二〇一七年七月  
大学入試センター (二〇一七) 「大学入學共通テスト(仮称)記述式問題のモデル問題例」二〇一七年五月  
大学入試センター (二〇二〇) 「令和三年度大学入學者選抜に係る大学入學共通テスト問題作成方針」二〇二〇年一月  
幸田国広 (二〇一九) 「高等学校国語科の改訂はどう受け止められているか」『早

稲田大学国語教育研究』第三九集、二〇一九年三月

【『学習指導要領』関係】

『高等学校学習指導要領』（現行版）…『高等学校学習指導要領』文部科学省、

一九九九年三月

『高等学校学習指導要領』（現行版解説）…『高等学校学習指導要領解説 国語

編』文部科学省、二〇〇〇年六月

新『高等学校学習指導要領』解説…『高等学校学習指導要領』（平成三〇年告示）

解説 国語編』文部科学省、二〇一八年七月

※この他、『学習指導要領』一般をさす場合には「『学習指導要領』とし、小学校・中学校を含めて現行版『学習指導要領』をさす場合には「『学習指導要領』（現行版）」と表記した。

※一九七〇年度版、一九九八年度版『学習指導要領』は、国立教育政策研究所の『学習指導要領データベース』によった。

（聖学院大学）